

瀬戸内国際芸術祭2019

Setouchi Triennale 2019

開幕直前発表会

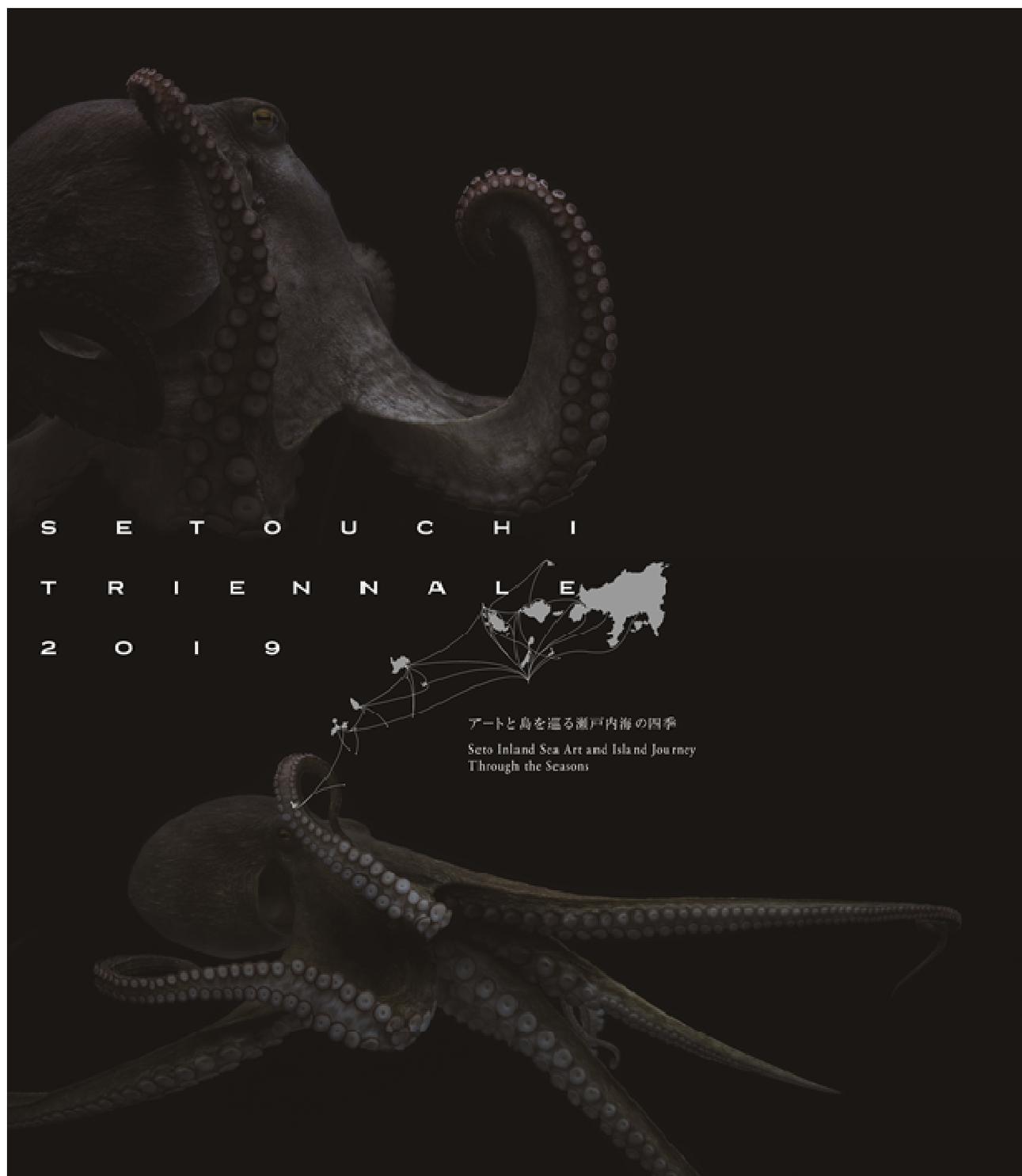
日時 | 2019年3月5日[火] 17:30-19:30

場所 | 渋谷ヒカリエ 8/COURT

主催 | 瀬戸内国際芸術祭実行委員会

(会期)

春(ふれあう春): 4月26日(金) - 5月26日(日) 夏(あつまる夏): 7月19日(金) - 8月25日(日) 秋(ひろがる秋): 9月28日(土) - 11月4日(月)



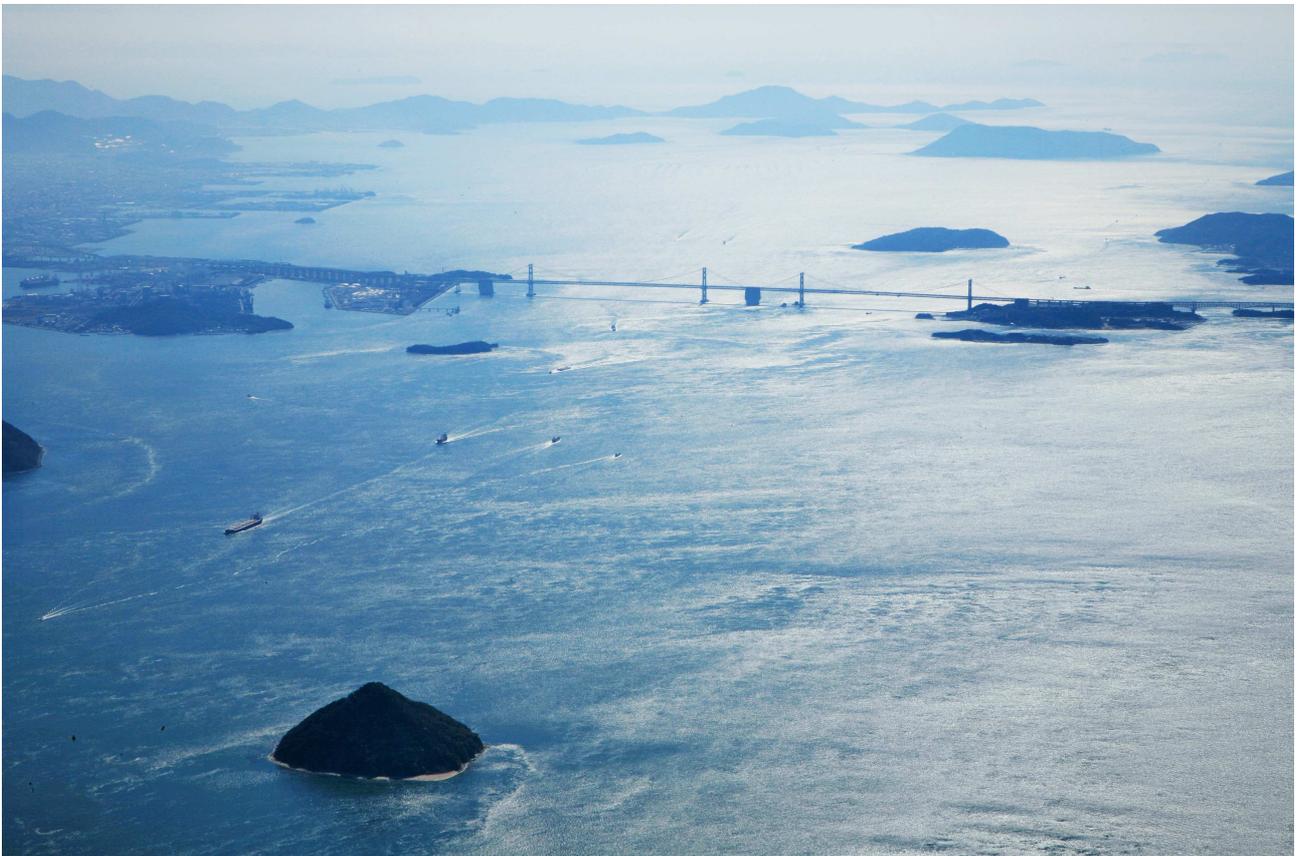
瀬戸内国際芸術祭とは

テーマ：海の復権

「島のおじいさんおばあさんの笑顔を見たい。」－そのためには、人が訪れる“観光”が島の人々の“感幸”でなければならず、この芸術祭が島の将来の展望につながって欲しい。このことが、当初から掲げてきた目的＝『海の復権』です。

有史以来、日本列島のコブクロであった瀬戸内海。この海を舞台に灘波津からの近畿中央文化ができたこと、源平、室町、戦国時代へとつながる資源の争奪の場であったこと、北前船の母港として列島全体を活性化したこと、朝鮮通信使による大切な大陸文化の継続した蓄積の通路であったことは、その豊かさを物語るものでした。しかしこの静かで豊かな交流の海は近代以降、政治的には隔離され、分断され、工業開発や海砂利採取等による海のやせ細りなど地球環境上の衰退をも余儀なくされました。そして世界のグローバル化・効率化・均質化の流れが島の固有性を少しずつなくしていく中で、島々の人口は減少し、高齢化が進み、地域の活力を低下させてきたのです。

私たちは、美しい自然と人間が交錯し交響してきた瀬戸内の島々に活力を取り戻し、瀬戸内海が地球上のすべての地域の『希望の海』となることを目指し、瀬戸内国際芸術祭を開催しています。



瀬戸内国際芸術祭2019

4回目となる瀬戸内国際芸術祭2019においても、これまで同様、海に囲まれどこからでもアプローチでき、農・工・商が混在した原初の人びとの存在を教えてくれる瀬戸内の島巡りを通し、この先地球上に人が生きること、展望を持つことを考えながら、プロジェクトを展開していきます。

主 催 瀬戸内国際芸術祭実行委員会

会 長： 浜田 恵造（香川県知事）
総合プロデューサー： 福武 総一郎（公益財団法人福武財団理事長）
総合ディレクター： 北川 フラム（アートディレクター）

会 期

春（ふれあう春）：2019年4月26日－5月26日
夏（あつまる夏）：2019年7月19日－8月25日
秋（ひろがる秋）：2019年9月28日－11月4日
総計 107日間

会 場

直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、
沙弥島(春)、本島(秋)、高見島(秋)、粟島(秋)、
伊吹島(秋)、高松港周辺、宇野港周辺



これまでの瀬戸内国際芸術祭

瀬戸内国際芸術祭 2010

会 期 | 2010年7月19日-10月31日 計105日間
会 場 | 直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、高松港周辺
作 品 | 76作品、16イベント(18の国と地域から75組のアーティスト・プロジェクトが参加)
来場者 | 約93万人

瀬戸内国際芸術祭 2013

会 期 | 春：2013年3月20日-4月21日、夏：2013年7月20日-9月1日
秋：2013年10月5日-11月4日 総計108日間
会 場 | 直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、沙弥島、本島、高見島、粟島、伊吹島、高松港周辺、宇野港周辺
作 品 | 207作品、40イベント(26の国と地域から200組のアーティスト・プロジェクトが参加)
来場者 | 約107万人

瀬戸内国際芸術祭 2016

会 期 | 春：2016年3月20日-4月17日、夏：2016年7月18日-9月4日
秋：2016年10月8日-11月6日 総計108日間
会 場 | 直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、沙弥島、本島、高見島、粟島、伊吹島、高松港周辺、宇野港周辺
作 品 | 206作品、37イベント(34の国と地域から226組のアーティスト・プロジェクトが参加)
来場者 | 約104万人

瀬戸内国際芸術祭 2019 新作ピックアップ

※画像は全て参考画像です。(無断での転載不可、一部過去作品)

<直島>

越智良江

「僕らが生まれる7日間の舟歌 (バルカカール)」

直島及び近隣から公募で集まった小学生とともに、彼らにしかできない演劇作品を創作し八幡神社にて上演する。ここでしか出来ない、彼らにしかできない作品を上演することは、子どもたちにとっては島の魅力を再確認する機会、来場者にとってはここでしか体験できない唯一無二の時間となるだろう。



<豊島>

垣内光司

「Circulation・Landscape」

小さな食堂「豊島鮮魚」から島のコンテクスト、周囲の海で魚を捕り、調理し、食べ、またその生ごみが堆肥となり果樹を育てるという循環のシステムを可視化する。ハイチェアや風呂敷、植樹された木等により、豊島の持つ「歴史的、文化的な生活の文脈」が「可視化」されることが作品の最大の狙い。



井筒耕平／会田大也

「コロガル公園 in 豊島」

旧神愛館(乳児院)の敷地内に子どもたちが自ら遊び方を想像することができる仮設公園を作る。基本的には遊び方が定まった遊具で遊ぶ公園でなく、公園の地形やコミュニケーションを促す「仕掛け」を自由に使いながら、自ら遊びを「創造」できるような公園づくりを狙う。



<女木島>

「島の中の小さなお店」プロジェクト——

島の人たちにとって便利で、他所から来る人にとって特色あるスポットとなるような、個性ある「小さなお店」の作品を展開する。

～「島の中の小さなお店」プロジェクト～

リヨン・カータイ（梁家泰）＋赤い糸

「ウェディング・ショップ」

結婚はそれ自体で社会の縮小版だ。ウェディングショップを通して、女木島という社会での結婚の意味の移り変わりを読み解き、人と人との多様な関係性を結婚と同じように祝福し、島に取り戻す。



～「島の中の小さなお店」プロジェクト～

レアンドロ・エルリッヒ

「Laundry」

洗濯物が回転している映像を流した洗濯機を一面に置き、もう一面に本物の洗濯機と乾燥機を設置する。「不在の存在」（2010年）で人気のレアンドロ・エルリッヒは、日常の嗜好に頼りながら、私たちの周りの世界の絵画的なダイナミズムを提示し、同じ空間に虚構と現実を混在させることで見る者を惑わせる。



～「島の中の小さなお店」プロジェクト～

山下麻衣＋小林直人

「世界はどうしてこんなに美しいんだ」

「世界はどうしてこんなに美しいんだ」という言葉が、ホイールライトによって車輪に浮かび上がる自転車に乗り、夕陽の沈みゆく瀬戸内の海を背景に走り続ける映像インスタレーションとともに、「世界はどうしてこんなに美しいんだ」の引用元である書籍「夜と霧」から展開させ、古本屋さんを模した読書ラウンジを併設する。書籍に囲まれた環境で映像を眺め、「世界の美しさ」について観客に考える「時間」を与える。



～「島の中の小さなお店」プロジェクト～

ヴェロニク・ジュマール

「Café de la Plage」

人々が本を買って、しばらく滞在し、コーヒーなどの飲み物を飲み、語り合い、本を読み、仕事をするためのフレンドリーなスペースをつくる。

そこに置かれるテーブルには熱によって色が変わるペイントが施され、コーヒーカップの暖かさがテーブルの上につかのまのドローイングを描く。テーブルは人間とオブジェの暖かさを明らかにする遊び場となる。

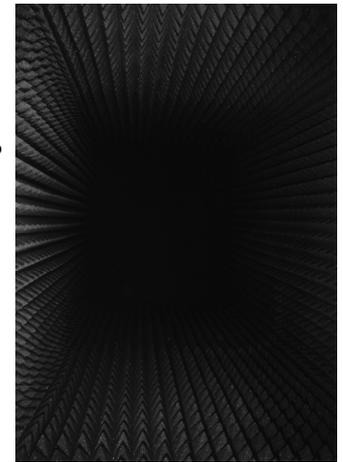


<男木島>

グレゴール・シュナイダー

「未知の作品 2019」

集落の中の空き家の多いエリアに、男木島の周囲をかたどった形の黒いトンネルを作る。そこは、過去の強い出来事を問う場所だが、その出来事自体は存在しない。作家は、不在を与え、存在を優先させず、知られていることより未知を好み、特に何かを目指すことができない経験に人を導く。知覚と知識のメカニズムに従って、まるで自分の脳内の層とよろい戸をさまよっているかのようである。



遠藤利克

「Trieb 一家」

人が去り残された家というものは、かつて暮らしていた住人の心的状況を濃密に残留させ、家それ自体が記憶の装置と化して踏み込む者を圧倒する。しかし、朽ち果てた家屋は、とうの昔に廃墟になり果て、住人の感情や記憶はすでに漂白され、情念や生命の気配といった類は、捨象され、廃屋はただひたすら、潔く佇んでいる。ここに関係を開く唯一の方途は、その「気配」に関与すること以外には無いように思えた。

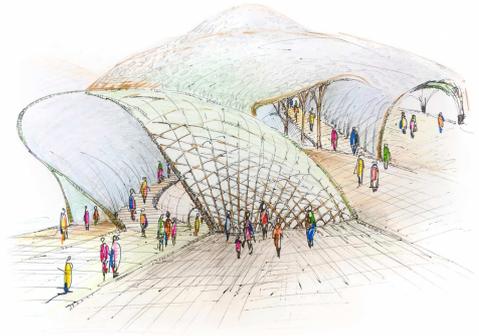


＜小豆島＞

ワン・ウェンチー（王文志）

「小豆島の恋」

小豆島には「オリーブの歌」という島民ならだれでも知っている歌がある。少女の恋心を歌い、恋人への愛しい心と小豆島の思い出を重ねた歌である。2010年から毎回小豆島で作品を制作しているワン・ウェンチーは小豆島の港に着くたびに、この歌のことを思い出し、今回の作品テーマの発想の一つにした。人と人との繋がり、島から離れても、ここで一緒に過ごした時間、楽しかったり、苦しかったり、ここで共有した記憶を忘れないようにという思いが込められている。作品は三つの空間に分けて、これまで作った三作品の象徴や記憶をそれぞれの空間に表す。



シャン・ヤン（向阳）

「辿り着く向こう岸 — シャン・ヤンの航海企画展」

子ども時代の体験から、作家シャン・ヤンにとって、船とは、心が安らぎ彼岸へ導くものであり、2015年に始めた航海プロジェクトの世界観を企画展として紹介する。企画展は廃棄された古い家具を使用した屋外作品と、小豆島の天川亭と福井亭という2つの倉庫を舞台に、企画に関するスケッチ、映像、資料、航行模型等を展示。草壁港という海の近くで企画展を行うことで、船が航海に出るイメージにもつながる。



香川大学×小豆島夢プロジェクトチーム

「演劇で見る小豆島のカタチ」

過去・現在の小豆島を紐解き、未来の小豆島を演劇を通して考察するプロジェクトチーム。300年余りの歴史を持つ小豆島の中山農村歌舞伎舞台と肥土山農村歌舞伎舞台にて演劇を上演する。島で暮らす高校生は、自分の未来をどのように考え選択するのだろうか。個人的・社会的なあらゆる場面で起こる選択という行為を、小豆島を舞台に考え、人々が培ってきた歴史ある空間で地域の方々と香川大学プロジェクトチームが共につむいでいく。



<大島>

クリスティアン・バステリアンス

「大切な貨物」

様々なメディアによって「人間の条件」を問い続けてきたオランダ人アーティスト、クリスティアン・バステリアンスが、瀬戸内の離島・大島に強制移住させられ、何十年にもわたって隔離され、閉じ込められてきたハンセン病患者たちの実話から触発された物語で、人間の尊厳を問いかける。



映像インスタレーションとその登場人物のうち数名が出演するライブ・パフォーマンス（高松港周辺）からなる「大切な貨物」を創作する。映像はホログラフで上映され、スクリーンに映し出される役者はあたかもそこに実在するかのよう、生身の役者と共演する。

鴻池朋子

「物語るテーブルランナー in 大島青松園」ほか

大島青松園にはいろいろな立場の方がいる。元患者さんたち看護師さん職員さん。それぞれの話は全部違って、大きな一つのタイトルや物語ではない。その豊かな「語り」をランチョンマット大の絵に描き、それを型紙として、手芸に親しむ方々が各々独自の材料や手法で制作する。様々な物語は、様々な手と素材を媒介として再話される。物語は観る、のではなく、手触りする。鴻池朋子は、他に「ムーンフェイス（仮）」、「リングワンデルング」、「月着陸」を展開する。

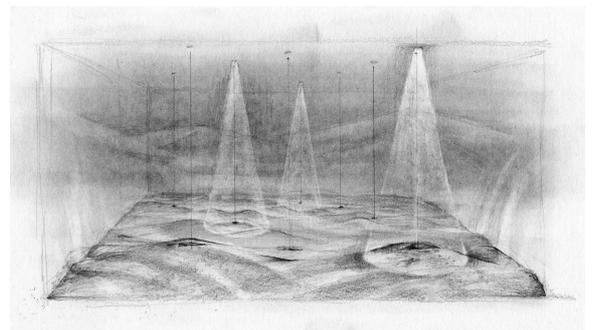


<沙弥島>

南条嘉毅

「一雫の海」

沙弥島の今の風景の礎となった塩田の様子を想起させるインスタレーション作品。塩田と坂出市の地上の風景と、既に地面の下にある歴史が、記憶を通して一致していく経験を糸口とし、一滴の海水を通して砂



の大地を境界に、結晶の世界を蓄積していく。ひと雫の水滴に対し、長い年月がかかって出来上がった塩の結晶の鍾乳石。日常に見えている世界とその課程で変化し続け蓄積されてきた世界、現実と非現実を旅するような空間をつくり出す。

マデライン・フリン+ティム・ハンフリー

「ピボット」

会場となる学校跡を視察した際、遊具がないのは寂しいとの思いから遊具（シーソー）を発案。シーソーは実際に遊べるだけでなく、AIを搭載し、来場者は会話も楽しむことができる。会話の内容では、与島地区5島の島民から得た昔話等が聞ける。



<高松港周辺>

「北浜の小さな香川ギャラリー」

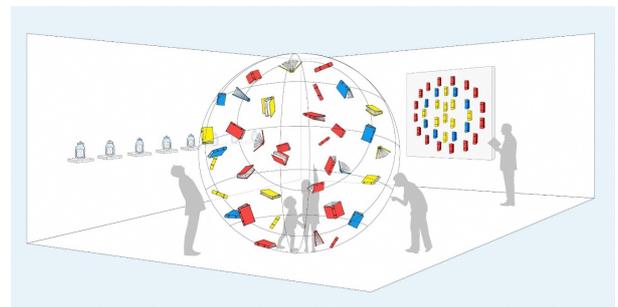
現代アーティストや工芸作家が北浜alleyを中心に、香川県の特産品を題材・素材とするアート作品を展開する。

～北浜の小さな香川ギャラリー～

太田泰友×岡薫／香川大学国際希少糖研究教育機構

「Izumoring-cosmos of rare sugar」

香川大学で世界に先駆けて研究されている希少糖。生命誕生の過程にも関わらず、研究者からも忘れられていた存在に秘められた宇宙観を、アーティスト太田泰友のブックアートと、岡薫によるサウンドインスタレーションによって表現する。



～北浜の小さな香川ギャラリー～

KOSUGE 1 - 1 6

「LEFTOVERS」

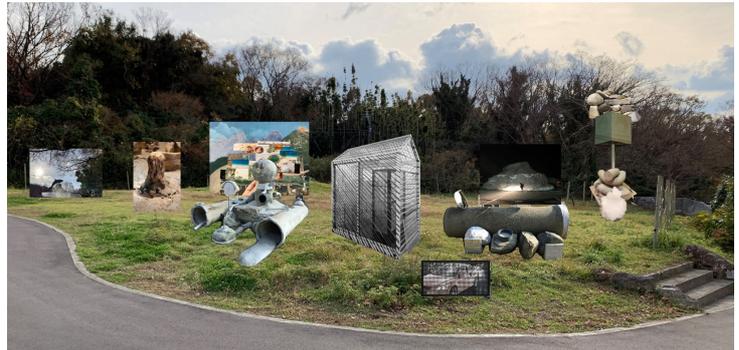
庵治石の工房には製造の副産物としての切れ端や破片が山のようにある。これらはいつか何かに使えるかもしれない、「LEFTOVERS」であり、これをデフォルトと位置付ければ目的が無いからこそ可能性の宝庫とも言える。その可能性の一つとしてシャンデリアを制作・展示する。社会に目を向けてみると、何かに使えるかもしれない、ぼんやりとしたLEFTOVERSは彼方此方に存在する。これらの多くをデフォルト状態と位置付け、それらに関係性を持ち込む、つまり社会の中でのデフォルト・モード・ネットワークを試みる。



金氏徹平

「S.F (Smoke and Fog)」

屋島や、そこから見える瀬戸内の風景の場所の特性として浮かび上がる、人為と自然の形や空間の関係性などが混ざり合った状態から着想し、大型看板型の写真作品、屋島から見える採石場の石と建材の破片を使った彫刻、木と水道管を接続した彫刻、アクリルボックスと植物を使った彫刻、電光掲示板を使った映像作品などによるインスタレーションを制作・展開する。



SABFmakers

「SETOUCHI ART BOOK FAIR」

古来よりここ瀬戸内は異国の文化芸術の交流地点であり互いに評価し合える場所だった。時代は変わり、多くのアーティストが3年に一度集まる瀬戸内国際芸術祭で、かつてのような異国の文化芸術を、アートブックを通して肌で感じられる場を作る為に SETOUCHI ART BOOK FAIR を開催する。

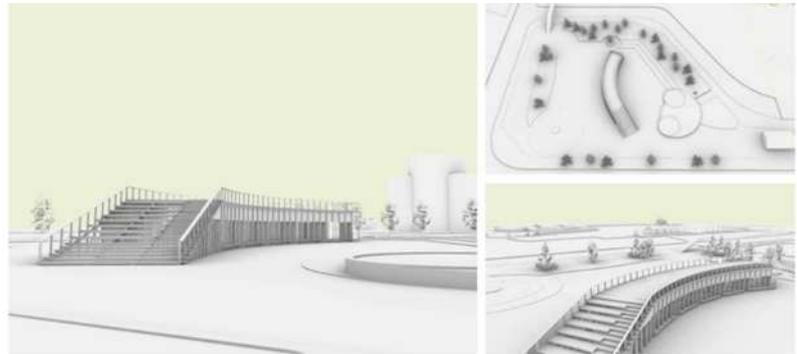


＜宇野港周辺＞

SUMI + GIBAULT

「UNO STEP」

現在は何もない地に創造する、Uno café、休憩所等からなる「UNO STEP」を通じて宇野を世界中の人々に親しみのある言葉「UNO」としてアピールする事で、旅の一つの通過点である宇



野港を今まで以上に印象付け、旅人、地元の人々の憩いの場となるよう提案。宇野駅から視界に入る UNO STEP は、旅人を瀬戸内の絶景へと案内する。

＜広域・回遊＞

伊藤キム

「侵入～運んでホイホイ」、「ラジオで踊る」

『侵入～運んでホイホイ』

船着き場、島に向かう船の中にダンサーが現れてパフォーマンスが展開される。“なにか”を運んでいるようなしぐさは、さまざまなイメージをかき立てる。途中から観客も巻き込み、最後には島の船着き場や海岸で焚き火を囲んで運んできた“なにか”を燃やし、みんなで踊りながら自らを祭る祝祭空間を演出。

『ラジオで踊る』

リン・シュンロン「国境を越えて・海」作品内の舞台上に置かれたラジオで生放送を受信しながら展開される伊藤キムの即興ソロ。



瀬戸内国際芸術祭 2019 メインビジュアル



(撮影：上田義彦)

瀬戸内国際芸術祭 2019 メインビジュアルのデザインについて

グラフィックデザイナー 原 研哉

今回の瀬戸内国際芸術祭のメインビジュアルは「海中の生物」がテーマ。瀬戸内に暮らす人々になじみがあり、瀬戸内の魅力がギュッと詰まった生物を素材に、瀬戸内国際芸術祭の魅力を発信できるビジュアルを作成しました。

平穏な瀬戸内海ですが、海の中は暗く、水中の生き物たちがひしめく世界です。

これまでのヴィジュアルとは裏腹に、一見、恐ろしげな「蛸」「鯛」そして「アナゴ」の様相。

瀬戸内国際芸術祭も来年で4回目。マンネリを打破するのに必要なものは「？」と「！」です。

遠くから眺めただけではわかりませんが、近寄ってみると、人の目を奪い、とても心に残るヴィジュアルであります。

これまでとは違った瀬戸内国際芸術祭のヴィジュアルに触れて、島々をめぐる船の上で、ぜひ新たなアートの様相に想いを馳せてみてください。

原 研哉

グラフィックデザイナー。(株)日本デザインセンター代表取締役。武蔵野美術大学教授。デザインを生活に蓄えられた普遍的な知恵ととらえて活動。無印良品、蔦屋書店のアートディレクション、GINZA SIXの仕事などで知られる。著書『デザインのデザイン』『白』『日本のデザイン』は多言語に翻訳されている。

上田 義彦

写真家。多摩美術大学グラフィックデザイン学科教授。代表作に、ネイティブアメリカンの神聖な森を撮影した『QUINAULT』、前衛舞踏家・天児牛大のポートレート集『AMAGATSU』、生命の源をテーマにした『Materia』シリーズ、30 有余年の活動を集大成した写真集『A Life with Camera』など。近著には、『FOREST 印象と記憶 1989-2017』、一枚の白い紙に落ちる深淵な「光と影」のモノクロームの写真群『68TH STREET』がある。